厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業）
分担研究報告書

病態別の患者の実態把握のための調査および肝炎患者の病態に即した相談に対応できる相談員育成のための研修プログラム策定に関する研究

研究分担者　平田　啓一　国立病院機構災害医療センター　第一病棟部長
研究協力者　島田　祐輔　国立病院機構災害医療センター　消化器科医師

研究要旨　肝疾患の病態把握の一環として、肝細胞癌破裂症例について患者背景や予後因子を分析・検討した。

A．研究目的

肝細胞癌はサーベイランスの充実により早期の発見･治療が可能となってきているが無治療のまま進行し、破裂によって発見される症例も存在する。破裂症例の患者背景を分析し、破裂予防および生命予後を改善するための対策を検討した。

B．研究方法

当科で2008年4月から2013年12月までに経験した肝細胞癌破裂の12症例につき、各症例の基礎疾患・肝機能・治療内容といった患者背景を分類し、破裂後生存日数との相関性を比較した。

C．研究結果

肝細胞癌の原因としては、C型肝炎 4例、B型肝炎 1例、アルコール性が5例、NASHが4例、原因不明が1例（重複あり）となり、肝細胞癌全症例と比較して非B非C型肝硬変を背景としているものが多かった。また、退院時肝予備能と腫瘍径で破裂後生存日数との強い相関性が見られた。後日肝臓切除術を行っている例で長期生存例が多く、腹膜播種も指摘されていない。

D．考察

肝細胞癌破裂はアルコール性肝障害やNASHのような生活習慣に起因する肝硬変を背景とするものが多く、適切な医療の介入がなされないまま癌化し破裂を来たしていた。破裂後の生命予後は残存肝機能を左右する点で腫瘍径も予後に影響を与えると思われる。一方で、破裂時の肝予備能は予後を必ずしも反映せず、破裂時は積極的な塞栓術を行うことで救命率が上がる。

E．結論

破裂を未然に防ぐには前癌病変である肝硬変の早期発見が重要であり、ウイルス性肝炎のみならず大量飲酒歴や肥満・糖尿病等、生活習慣から肝硬変を合併しうる患者でも腹部超音波検査や血液検査で定期的な経過観察を行い、異常の早期発見に努めることが望ましい。また、破裂時には緊急処置として塞栓術を行い、集学的治療で肝機能を改善させた上で外科的切除を行うことが予後改善に繋がる。

F．研究発表

1．論文発表

なし。

2．学会発表

1) 島田祐輔，他．当院で過去5年に経験した肝細胞癌破裂11症例の背景・予後についての検討．第17回日本肝臓学会大会

G．知的財産権の出願・登録状況

なし。